第２章　山形県の近代和風建築の概要

今回の山形県近代和風建築総合調査に於いて３次調査の対象となったのは、第１章・第２節に定義され、第１次調査で取り上げられた８３１件のうちから建築的に質が高いと考えられる２７件である。近代和風建築という概念は極めて漠然としており、建築の種類からみても住宅建築、宗教建築、公共建築等がすべて対象となる。住宅だけを見ても農家、商家、漁家等があり、これらを含むすべての中から２７件を選定し、これをもとに山形県の近代和風建築の特徴を概説する事は難しい。

本調査では、１次調査リストのうちから住宅建築（旅館、料亭を含む）を主とし、若干の公共建築を加えたものを対象とした。

山形全県を庄内、村山・最上、置賜の３地域に分け、３名の調査委員がそれぞれの地域に於いて９棟ずつの調査を行った。

第１節　置賜地方の近代和風建築

明治から昭和初期に於ける置賜地方の主たる産業と言えば、養蚕関係業（製糸・織物業も含む）が中心であった。上杉治憲（鷹山）以前に既に蚕糸業は存在していたが、鷹山の勧業政策により一気に盛んになった。特に明治になり、横浜港の開港などにより外国との貿易が盛んになると、一層生糸や絹織物の需要が増え、大正から昭和の初期にかけて、多少の好・不況はあったものの、養蚕関係業は全盛期を迎えた。しかし、戦後の朝鮮動乱による好景気を最後にその後は下降の一途を辿った。

桑の栽培から始まり絹織物が出来上がるまでには、農山村から町場に至るまでの多くの人々が関係している。又、初期に於いては家内工業による生産が主たるものであったから、この地方の建築については養蚕関係業との関連を抜きにしては語る事は出来ない。

東北地方の中央部から日本海側にかけては、中門造りの民家が分布することで知られているが、置賜地方の中門造りは切妻で軒の高い馬屋中門を持つのが特徴である。これは中門の小屋裏を養蚕に利用するため、採光と風通しを考えて建てたものと言われている（高橋家住宅、飯豊町）。又、「ゆどの」と呼ばれる、糸繰り・機織りのために使用される部屋が座敷部分の前部に付いている事が多く、このような民家は明治期になってもたくさん造られている。他に、母屋全体を養蚕に使用出来るように、建物を総二階にして、妻面に窓を設け、小屋裏をも含めて３層を養蚕に利用しているものもある（泉妻家住宅、南陽市）。又、母屋とは別に養蚕専門の小屋も建てられ、採光・風通しのために窓が工夫されている（斎藤家養蚕小屋、長井市）。

養蚕関係業は明治の初期までは家内工業が中心であったが、明治の中期になると政府の殖産興業政策が東北にも及び、養蚕と製糸・織物が分離し、町場に近い所に製糸工場・織物工場が出来るようになる。長谷川製糸工場（高畠町）は明治１５年に創業以来、最後まで生産を続けてきた製糸工場であるが、中国等の外国産繭に押され地元での原料調達が難しくなり、１９９７年春に工場を閉鎖せざるを得なくなった。米沢市の吉亭は昔生糸や絹織物の買継商・織元をしていた家であるが、現在は米沢牛の料亭となっている。又、生糸

や絹織物は輸出が中心であったため、外国からのバイヤーも多かった。県内でも有数な製糸工場を営んでいた多勢家（南陽市）では、多額な費用をかけて本格的な洋風建築を造り、外国人バイヤーのための接待用客室として使用していた。米沢市駅前の音羽屋旅館には、造りは和風であるがベッドルームを備えた客室があるが、これも外国人が泊ることを考慮したものであろう。

この様な文化的背景を反映してか、この地域には洋風建築が多く、特に医院建築には特徴のあるものが見られる。長井市の小池医院はイギリスのチューダー朝ハーフチンバー様式を外観に取り入れたものであり、川西町の須貝家住宅（旧医院）は茅葺きの屋根に下見板貼の壁と上げ下げ窓を持つ建物である。洋風建築はこの他に住宅や公共建築、銀行建築などに多く見られる。

金融機関も養蚕関係業者を主な取引先としており、旧東銀行の高畠支店は製糸工場（長谷川製糸工場）の敷地内にあり、宮内（南陽市）の本店（現山形銀行宮内支店）には担保として預かった繭や生糸を保管するための３階建ての巨大な土蔵が今も残る。繭や生糸・絹織物を保管するには土蔵が適しており、町場にある養蚕関係の商店（生糸や織物の仲買商、問屋、織元、呉服屋等）には多くの土蔵がある。宮内（南陽市）の粟野家住宅（呉服商）は店も土蔵造であるが、母屋の広い通り土間を抜けた裏庭には６棟の土蔵が立ち並んでいる。土蔵の数は必ず奇数であると言われ、土蔵を店だけでなく、座敷すなわち蔵座敷として居住用に使用している所もある。

日本最初の建築史家であり、建築家でもある伊東忠太氏や同時代に活躍した建築家の中條精一郎氏は米沢市の出身で、高畠町にある亀岡文殊堂は伊東忠太氏、上杉記念館（旧上杉伯爵邸、米沢市）は中條精一郎氏の設計になるものである。

最後に、今回３次調査で見た建物は、農家を除いた７棟中６棟が洋風小屋組みを使用している。上杉会館や音羽屋旅館等、外観は純和風の屋根形式を取っていても、小屋組みは洋風のものがあり、明治期以降、急速に洋風小屋組みが普及していった事が分かる。これに対して、１間の長さとして１９１０～１９２０mm（約６尺３寸から６尺３寸５分）を使用しており、一般的に言えば江戸中期～後期の寸法と差がない。他の地域では６尺間を

泉妻家住宅

斉藤家養蚕小屋

須貝家住宅

旧東銀行宮内本店土蔵

粟野家住宅

亀岡文殊堂

使用している事を考えると、1間の寸法に対しては保守的な地域と言える。（西野）

第2節　最上・村山地方の近代和風建築

新庄市、金山町、最上町などを含む最上地区は、山形県内でも有数の豪雪地域である。また年間を通して湿度が高く、特に9月、10月の平均湿度が80%を超えていることも気候的な特徴である。伝統的な建物では、蓄積された経験が形態や意匠に反映されてきたが、明治以降の構造体の洋風化やガラス戸の導入などにも、豪雪地域特有の工夫が見られる。

山形市、村山市、寒河江市などに代表される村山地区は、地形的には盆地状に周囲を山々に囲まれて、県内では寡雪・弱風の気候である。また山形市は明治以降、山形県の県庁所在地として内外の情報がいち早く集まる中心地となり、建築物に対しても他の地域より早い進取の様相が見られる。

金山町のカネカ商店に見られるように、明治末の大火によって失われた民家は、大正期には大屋根切妻形式の建物として相次いで建設されたが、その頃には、明治維新以降の建築物の洋風化の一環として導入された小屋組のトラス架構を見ることができる。このトラスは、明治40年建設の佐藤範助家住宅や明治44年建設の柏倉宏幸家住宅など、村山地区ではすでに明治末に導入されており、民家への導入としては比較的早いものである。

座敷蔵（専門用語では「蔵座敷」が一般的であるが、ここでは建物を示すために「座敷蔵」と表記する）は、全国的にも山形県下に多く残されている特徴ある蔵である。その中でも特に最上・村山地域には、県内の80数%が集中している。建設時期を見てみると、明治期に建てられたものが、約50%と最も多い。大正と昭和期に建てられたものを合わせると18%に達し、この地に座敷蔵が建てられたのは、主に明治以降ということになる。その理由として、江戸期の社会的な束縛が解けて、旧来の旦那衆ではなくても財力さえあれば誰でも建てられるようになったことがあげられ、その際旧来の伝統にない文明開化の象徴としての西洋式架構法（トラス）が積極的に採用されたものと推測される。

屋根葺材には様々な種類が存在する。中山町の柏倉宏幸家住宅では、現在はトタン葺きであるが、当初は木羽葺きで竹釘を使用していた。天童市の佐藤範助家住宅、出羽桜美術館には、村山地区では珍しい瓦葺きが見られる。金山町のカネカ商店では、昭和30年代まで杉皮葺きの石置屋根であったが、トタンに葺き替えられている。木羽葺きや杉皮葺きでは、屋根勾配が草葺きより緩いため、そのまま新しい屋根葺き材であるトタン葺きに移行する際、屋根替えをする必要がなかったことが、伝統建築の形態を残したまま近代化が容易に進んだ要因のひとつであろう。

職人の技術に関しては、大石田町の左官職に見られるように、明治期に栄えた鏝絵の技術も伝わっており、座敷蔵の戸前や窓廻りを飾っている。欄間の彫刻など、現在では造ることが困難になった伝統的な職人技も残されている。

主屋の外周の建具や、座敷蔵の下屋廻りなど、ガラス戸がはめられ始めるのも大正末から昭和初期の頃である。ガラスも波打つ板ガラスをそのまま使用している住宅も多いが、この木製ガラス戸は、現在急速にアルミサッシに変わりつつある。

著名な建築家の設計した建物としては、米沢市出身の伊東忠太が設計した山形市の明善寺がある。伊東は、西洋建築の追従が主流であった当時の建築界では珍しく、東洋の建築の形を追求した碩学である。明善寺は、同時期に設計した印度様式の築地本願寺とは異な

る木造和風であり、屋根架構も和小屋が採用されているが、本堂の両側に付随する楼塔が、伝統的な寺院建築にはないデザインとなっている。（山畑）

第３節　庄内地方の近代和風建築

住宅ではまず豪農や旧地主層のそれが対象となった。酒田市の小松貞夫家、遊佐町の旧青山本邸、鶴岡市の旧風間家住宅である。小松家は昭和４年、旧青山本邸は明治２３年、風間家は明治２９年の建築である。これらは生活形態の違いを反映し、屋敷構・建築形態がそれぞれ異なったものとなっている。特に小松家は洋風の外観を持っており、当時の農村地帯では極めて珍しい建築であった。然しながら平面形式に着目すると小松家、旧青山本邸ともに藩政期以来の伝統的農家の平面形式をそのまま受け継いだことが知られる。また旧風間家は一見すると複雑な平面形式を持つが、酒田の典型的な町屋の平面形式を持つと言われる造り酒屋橋本家に通じるものがある。即ち、通り土間に面して茶の間、なかのま、仏間、その背面の部屋列に納戸、座敷を置いている。いずれにせよこれらの住宅を見る限り近代になっても新たな平面形式を生み出すに至っていなかったことが知られる。

他の地域と同様、庄内に於いても旅館、料亭が３次調査の対象となった。鶴岡市の鶴岡ホテルと新茶屋がそれであり、いずれも明治期の建築である。鶴岡ホテルは大正年間に増築されその後も改造されているが、客室部分からは当時の様子がそのまま伝わってくる。新茶屋は簡素ではあるが数寄屋を意識したものとして興味深い。

明治に入り幕藩体制が崩壊すると、旧各藩では旧藩士の生活費対策に苦心することになる。庄内藩でも同様で士族あげて未開地を開墾し桑園を造成、養蚕蚕糸事業を興すことによってこれを乗り切ろうとした。このための蚕室として建てられたのが松ケ岡開墾場蚕室である。何棟も連なり建築された桁行２１間にも及ぶ長大な２階建ての蚕室群はまさに新しい時代の到来を告げる徴であったろう。

明治２７年の酒田の大地震はその後の住宅建築に影響を及ぼした。小松家、橋本家、風間家はこれを意識して建てたと言われ、小松家では筋交いが多用されている。特に橋本家では地震による火災延焼防止のため隣家との境に防火壁が巡らされたのが注目される。

小屋組などにトラスが用いられる様になったのも近代の特徴である。小松家、風間家、立川町歴史民俗資料館（旧狩川村役場）にこれを見る事が出来る。

これら庄内の建築には旧庄内藩のお抱え大工も関わっている。松ケ岡開墾記念館、立川町歴史民俗資料館は高橋兼吉、安良町公民館（旧鶴岡警察署大山分署）は高橋権吉が大工棟梁として采配をふるっている。（飯淵）

03-010　旧東銀行高畠支店

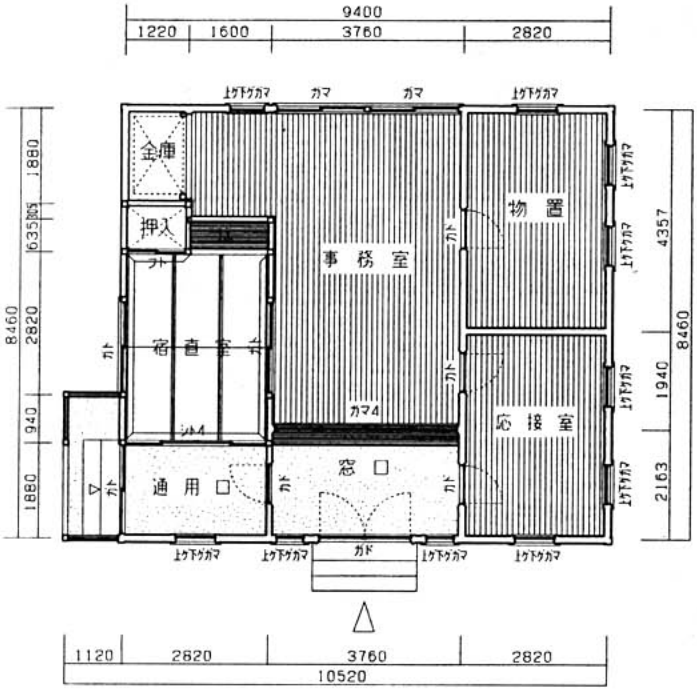
東置賜郡高畠町大字竹森６０２

木造洋風銀行（長谷川製糸工場内）　昭和初期

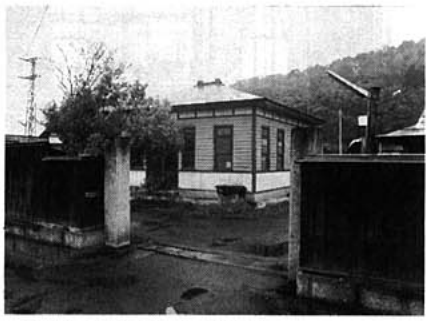
長谷川製糸工場（長谷川合名会社、明治１５年設立）の創設者であり、この地方の大地主であった１５代長谷川平内氏は東銀行（長谷川合資会社、明治３３年６月設立）の頭取でもあった。東銀行は養蚕関係者を主な取引先とする銀行であり、東銀行宮内本店（南陽市にある現山形銀行宮内支店）には、担保として預かった繭を保管する３階建ての巨大な土蔵が今も残っている。この建物は東銀行の支店として長谷川製糸工場の敷地内にあり、長谷川製糸工場の金の出納を管理する銀行であった。長谷川製糸工場は原料の繭の調達が厳しくなり、１９９７年春に工場を閉鎖した。東銀行はそれ以前に両羽銀行に吸収され、現在、両羽銀行は山形銀行と名称を変えている。

この建物は、製糸工場が最も盛んであった昭和の初期に建てられたと言われているが正確な記録は残されていない。施工者もはっきりはしないが、工場内の建物は営繕（工場大工）が建てていたと言う。製糸工場の正門を入るとすぐの左手に建てられており、間口５間に奥行４間半、小屋組は和小屋、寄棟カラートタン一文字葺（元瓦葺）、外壁は下見板貼で軒下１尺程は漆喰塗とし、腰壁部分は竪板貼である。４隅に柱型を付け、石灰岩の基礎を敷いている。木部はサーモンピンク系のペイント仕上げである。

間取りは、正面入口を入った所が「窓口」でカウンターを隔てて「事務室」があり、「窓口」の左右に「通用口」と「応接室」、「事務室」の左右に「宿直室」と「物置」がある。「事務室」奥の左手に作り付けの大型金庫を備える。内装は基本的に天井と壁は漆喰塗り、腰壁は竪板貼、床も板貼である。「宿直室」は和風で、「窓口」と「通用口」はコンクリート土間となっている。「事務室」と「宿直室」は引違い窓であるが、他は上下窓を使用しており、そのストッパーは昔の列車の窓と同じ物を使用している。（西野）

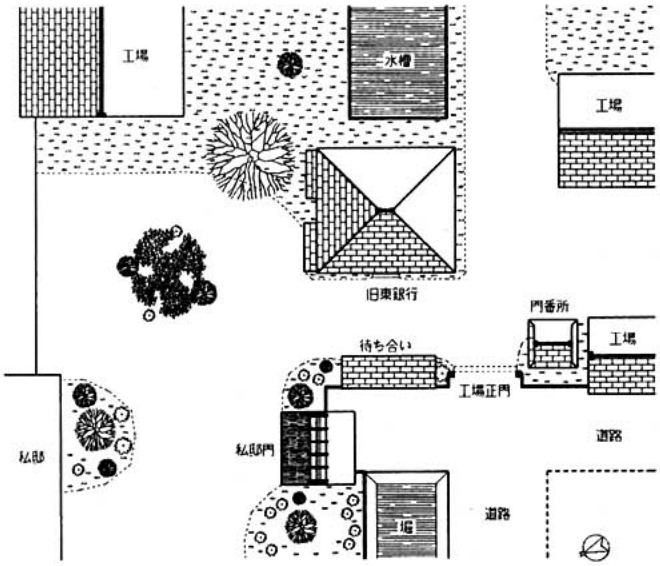


旧東銀行　高畠支店　平面図



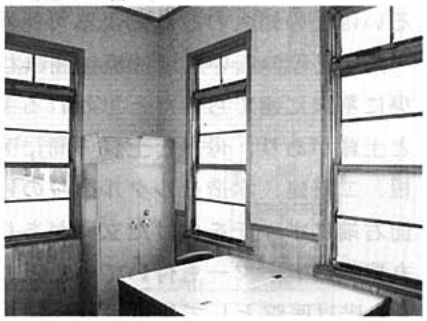
製糸工場正門より見る

南東側よりの外観



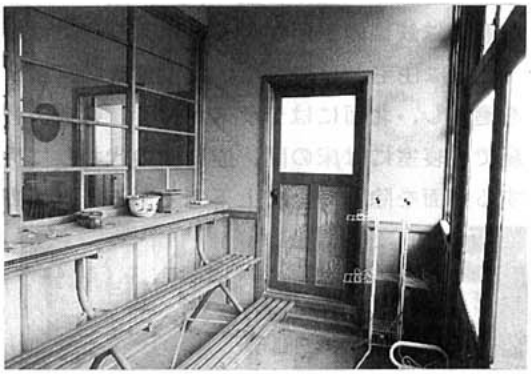
旧東銀行 高畠支店 配置図

入口部分庇

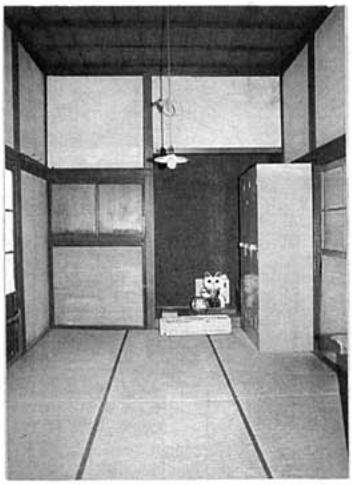


応接室内部

事務室内部東面

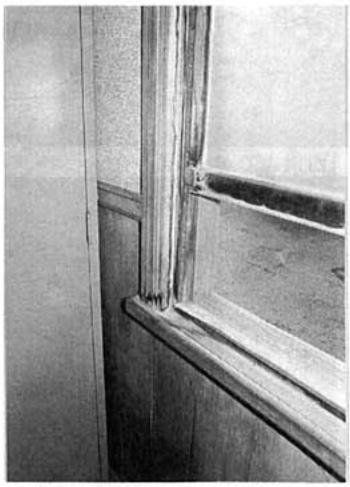


窓口内部



宿直室内部東面

事務室内金庫



上げ下げ窓ストッパー

13-008　（財）出羽桜美術館

天童市一日町一丁目４番６号
美術館　木造平屋建　大正元年

主屋の下部構造は、布石上に高さ 20cm の床束が立てられ、その上に足固めのまわる構造となっており、床下の換気が図られている。土台の隅部はＬ形金物によって保護されている。

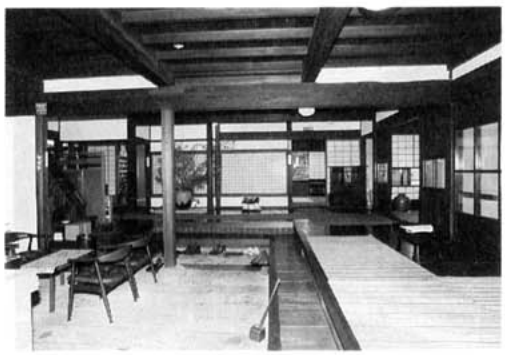
軒は出桁造りとなっており、軒高も高く、軒の出も深い。下屋の桁には丸太が使用され、他の部位と趣を異にしている。屋根は瓦葺きの寄棟である。軒下と下屋の屋根との間の漆喰で仕上げられた小壁が暗い軒下に映える。主屋外周の建具はガラス戸であり、ガラスは当時のものが使用されている。現在ではアルミ製の雨戸がその外側に取り付けられている。以前は、このガラス戸の外側に格子がはめられていたことが、鋼製のレールと鴨居の欠き込みによってわかる。東側の壁にも鋼製レールと鴨居、戸袋が残されており、以前は開口部が存在した。戸袋はこのときに新しいものと取り替えられている。佐藤範助邸の戸袋のような屋根はなく天板が載るだけである。

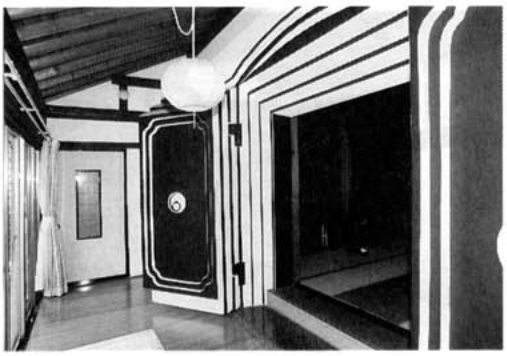
主屋の小屋組は、トラスと和小屋が併用さている。トラスの振れ止めは貫構造になっており、楔の代わりに羽状の部材が取り付く。

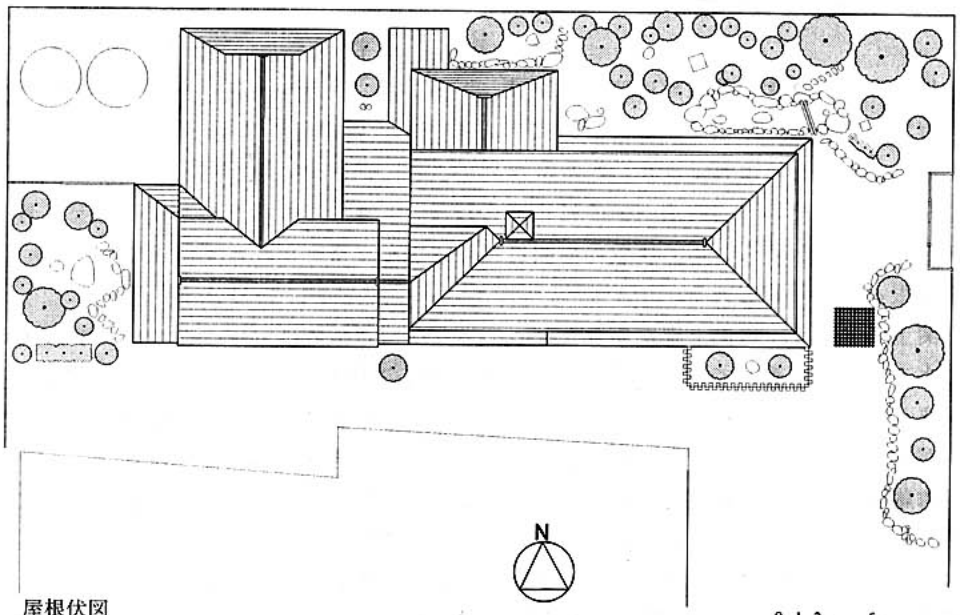
蔵座敷の基礎部は、通気のため石造の開閉式引き戸が設置されており、常時は開いている。西側下屋の雨戸の戸袋は曲線状の金物で受けており、主屋の木製の戸袋受けと同様の形態をとっている。蔵座敷の窓には鉄製の庇が掛けられ、伝統的で重量感ある鎧戸と近代的な繊細な鉄が対比された表現に優れる。また、蔵座敷の戸前には、漆喰の白に対する黒い縁取りが強調されている。（山畑）

外観

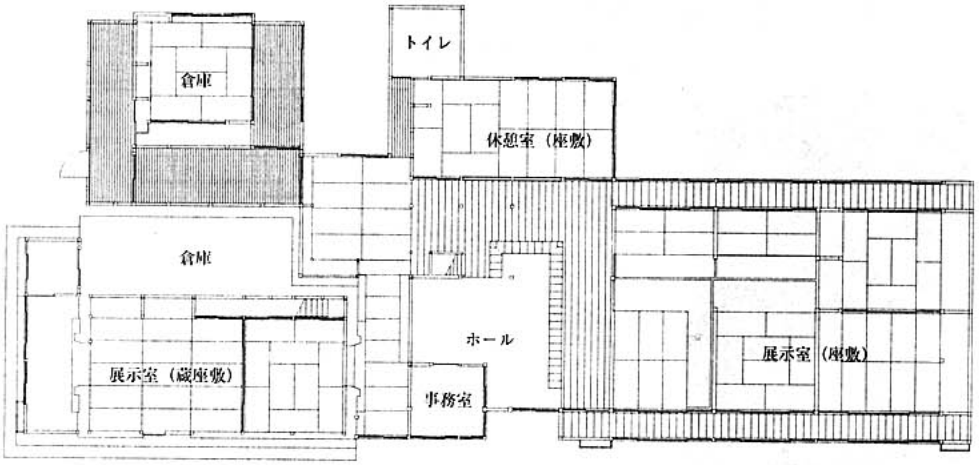
外観（蔵座敷）


入口


蔵座敷入口

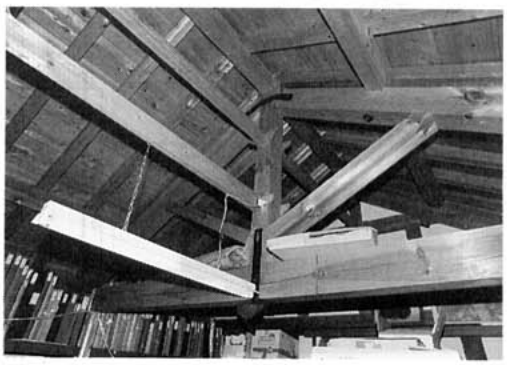


屋根伏図



1階平面図

展示室（座敷）



小屋組